

# 風土



4

## 箬編む指春陰の竹たがへては

(句集『竹取』より 昭和三十六年作)

この句は「佐渡」三十二句の群作のひとつです。昭和三十五年に「風土」を立ち上げた桂郎師は俳句に心機一転を期し、この頃よく旅にでています。時代的にもいわゆる「境涯俳句」の行き詰りがあり、風土に根差した生業や暮らしに打開の糸口を求めたのです。竹箬を編む職人の作業を見つめながら、「春陰」という季語を置き、単なる天候だけでなく職人の心の翳も伝えています。

## 叱られて島の鼻まで鋤田牛

(句集『竹取』より 昭和三十六年作)

この句も「佐渡」群作のひとつです。島の岬の先まで荒地を開墾した田を牛に鋤かせているのです。何度か止まってしまう牛を励まし、叱咤しながら「島の鼻」まで鋤いていくのです。眼下には日本海の荒波が見えます。「裸電球春宵文彌節熱す」の浄瑠璃の句など、佐渡の風土や文化を詠んだこの群作は、第一回の俳人協会賞に輝きました。

椿 落つ 樹 下 に 余 白 の ま だ あり て

(句集『有今』より 昭和五十五年作)

「椿」は器師の句では何度も登場し、それぞれ違った姿を見せてくれます。読みのポイントは「余白のまだありて」で、まず樹下を埋め尽くすほどの「落椿」を想像させます。その中のわずかな「余白」の「白」は「落椿」が紅であることを知らせています。そして落ちる前の椿は意志あるごとくその「余白」を指して落ちるのです。主体は「椿」であることに味わいがあります。

大 股 に 近 づ い て 来 て 虚 子 忌 な り

(句集『有今』より 昭和五十五年作)

「風土」は石田波郷の「鶴」に繋がる系譜です。器師はよく「波郷、桂郎、器」と系譜を口にしています。じつは当の波郷は、秋桜子の下にありながら、自己の系譜を「虚子、青畝、波郷」と述べているのです。それほど虚子は大きい存在で、学ぶべき俳人なのです。器師もしかり。四月八日の「虚子忌」を「大股で近づいて」と詠みました。虚子の巨人ぶりを彷彿させます。

牡蠣啜る

南うみを

歯朶刈るやこほりの雫うち払ひ

磐座ををろがみをれば冬の虹

大根を抜きに三日の畦を踏む

雪掘つて白菜坊主揺り起こす

牡蠣漁へ舟の芯なす箱火鉢

牡蠣 筏揺 すりだしたる 艦の波

あゆみ板大揺れさゆれ牡蠣はこぶ

牡蠣を選る石を放つてゐるやうな

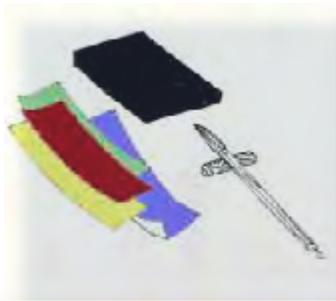
ぐわしやぐわしやと山崩しては牡蠣を割る

牡蠣 割りの窓を鳶の二度三度

牡蠣 割女ふり向きざまに値を云へり

牡蠣 啜る殻を三途の石と積み

「俳句四季」四月号掲載句を含む



# 竹間集

同人作品



初詣

鈴木 石花

フランス語のアベマリア聴く冬満月  
「がんしう」の夫妻寄り添ふ冬の星  
一点の雲無き初日拝したり  
鶏旦や子規の「句めぐり」枕辺に  
一面に東天紅鶏元旦紙  
連れ立ちてぼつくり様へ初詣  
左手右手雪の白根と富士高嶺

初鶏

岩木 茂

初春の水琴窟の調べかな  
初鶏のあと竈火の匂ひけり  
小舟にて若水汲みの来てゐたり  
大寒や冷まして白湯の甘くなる  
アトリエに漁夫の自画像寒怒濤  
一村を沈めて湖の氷りけり  
絵具より待春の海絞り出す

初雀

小林 輝子

一步出で半歩退りて年迎ふ  
蓋開けの笹の葉匂ふ蕪鮓  
初鏡女は心より老ゆる  
踏俵あやつる術を忘れけり  
朝日子を電線に待つ初雀  
箸逃ぐる草石蚕に匙添へらるる  
なもみはぎ婆からわらし剝がし去る

年頭墓参

田村すゝむ

空白の一日もなし日記閉づ  
六時五十一分東京初日の出  
年頭墓参亡妻に近づく思ひかな  
綿虫のとぶより軽し命かな  
北緯<sup>沖繩</sup>二十六度鯨に出合ふ島  
石庭の余白の枯れを見て渡る  
若冲<sup>石峯寺</sup>の石の羅漢は枯れの群

臘 梅

田中佐知子

ガガーリンに凍てて真紅の供花の薔薇  
暖房音高しボルシチ待つてをり  
乗り換へて子らへ近づく暖房車  
夜汽車去り雪のホームの残さるる  
軒氷柱一本ごとに月宿し  
終の地か捨て処無き雪積み上げて  
臘梅の香の透きとほる禪の寺

着ぶくれ

門伝史会

大年の声を重ねて魚市場  
製塩<sup>能登</sup>の蒸気こもりて山眠る  
欣一の「塩田句碑」や冬怒濤  
千枚田見て来し夜の蕪ずし  
加賀蓮根泥付きを買ひ年用意  
お守りに難関突破受験生  
着ぶくれて尖る心の消えてをり

「老樹」以後(三十六)

野沢しの武

連翹の咲きて千蔭の亡き簾  
衛士三人諸脛見せて雛壇に  
午後は雲重く上巳の節句果つ  
雪横降り雛壇にいま雪洞点き  
露の臺昨夜の雪のまだ残り  
さすがに雪降らずなりしか衣更着とて  
久の帰宅雪吊はまだ解かれずあり

# 山河集

同人作品



南うみを選

賀状受く陸前高田の新居より  
身を射らる寒満月の光かな  
染抜きの家紋風呂敷福寿草  
乗り出して走者励ます冬帽子  
守りゐるものに骨量白向ぼこ

鈴木庸子

縫初の金糸銀糸の鳥の舞ひ  
うすうすと三分の色や寒牡丹  
降り止みて白に沁みゆく寒夕焼  
呼び込みの声裏返る年の市  
寒禽の人影のなき畑に鳴く

鶴岡節子

毛糸編む母より暗みはじめけり  
初明り吾のおでこに輝けり  
母の齡さかのぼりゆく雑煮かな

森屋慶基

子の帰る足跡門に今朝の雪  
母を眼の届くあたりに冬籠

雨宮桂子

大樽をどつかと据ゑて寒九かな  
湧水に五指を沈める春隣  
侘助ははづかしがりやかも知れぬ  
探梅のみんなスキップジャンプかな  
万両や猫の番する屋敷神

池田光子

寝正月銀河の星と揺られたし  
蜜柑山は大き日溜り初山河  
女正月ケトルは笛の吹きどほし  
寒肥を宝のごとく埋めをり  
日矢射して葉牡丹の渦ざわめきぬ

# 風土独語／南 うみを



賀状受く陸前高田の新居より

鈴木 庸子

この句の「陸前高田」は、東日本大震災の大津波で大変な被害を受けた所です。そこからの年賀状です。「新居より」に再建なったことを知り、作者は安堵したのです。

尻上げて漕ぎ出すペダル冬の朝

高橋まき子

俳句は見えるように描くことが基本です。「尻上げて漕ぎ出す」がそれに当たり、力強く踏み出す姿がありありと見えます。さあ、寒さをもともせず元気に出発です。

縫初の金糸銀糸の鳥の舞ひ

鶴岡 節子

今年初めての裁縫です。「金糸銀糸」から和服の縫い物でしょう。「鳥の舞ひ」から鶴の舞い姿を想像します。正月らしいめでたさが全面に出ています。

突風に押され枯葉に追ひこされ

平井 改子

この句は「押され」、「追ひこされ」のリフレインで、風の強さをうまく引き出しました。風に煽られる人物がよく見えます。

毛糸編む母より暗みはじめけり

森屋 慶基

「毛糸編む母」はよくはありますが、「暗みはじめけり」にただならぬものがあります。単に夕暮れになったのではなく、作者は母がいち早く影絵のように暗んでいくのを感じているのです。年々年を加える母への想いが表出した世界です。

なほ寒し柩に花を満たしても

内藤 静

この句は現実の寒さと心の寒さを重ねて詠んでいます。心を通わせ合った人の死でしょう。交感が途絶えることの悲しみが「かほ寒し」と作者につぶやかせるのです。

大樽をどつかと据えて寒九かな

雨宮 桂子

「寒九」は「寒の入り」（一月五日）から九日の寒さ厳しい頃を言います。「大樽」は漬物樽でしょうか。「どつかと据えて」に寒中に備える気構えが伝わります。

マネキンの歩道に立つてゐる寒さ

中嶋 陽子

これも「寒さ」の句ですが、素材に「歩道のマネキン」を持ってきたところが面白いです。展示の前か後か、裸の「マネキン」を想像します。それが作者の「寒さ」の感覚を刺激しました。

蜜柑山は大きき日溜り初山河

池田 光子

「蜜柑山」と「初山河」は季重なりですが、「初山河」を季語とし、「蜜柑山」はその頃の季節のモノ（季物）として読みます。作者は山全体を覆う蜜柑の黄色を「大きき日溜り」と見立てました。

# 風土集



## 南うみを選

尻上げて漕ぎ出すペダル冬の朝  
逗子 高橋まき子

裾短き母の着付けや初詣

白息の大き小さきを遊びをり

まつ直ぐに独楽立つまでを見つめをり

重ね着を脱ぐ裏返るそのままに

初夢に亡き母の佇つ向う岸

いわき

平井改子

探梅行一輪光る日和かな

笹鳴や凜と静もる竹林

寒晴やどこ迄伸びる飛行雲

突風に押され枯葉に追ひこされ

源氏絵をひもとく遊び女正月

川崎

内藤 静

来し方の長く短し霜柱

なほ寒し柩に花を満たしても

しんがりに付くしたたかに着膨れて

八十の春を迎ふるイヤリング

真ん中を射貫く音して弓始  
東京 中嶋陽子

寒牡丹水音高き芭蕉庵

マネキンの歩道に立つてゐる寒さ

腰つつく赤子の靴や初詣

淑気満つ相撲幟のはためきて

蔵の扉の三つ四つ開いて四温晴

福生

雨宮桂子

寒木やわが子のごとく寄生(ほよ)抱く

日脚伸ぶメトロより出る「はこね号」

冬の蠅あはきひかりをしたたむる

指先の遊びつかれて毛糸玉

佗助や小さき階ある山の墓

町田

松本 胡桃

独り居に少し憧る三日かな

冬木の芽静かな闘志もらひうく

九条葱豊かに盛られ京の旅

毛糸編む耳全開になりにつけり